



# 取り残された 心の叫び聞いて

## 3 寄り添う

「行政の相談窓口は、気休めにすぎない。解決策を見つけない限り寄り添ってほしくない。心の叫びを聞く場所がないんです」。被災者の心の支え方を模索する東日本大震災圏域創生NPOセンター事務局長の太田美智子さん(60)は言う。

その言葉をかみしめながら二月半ば、精神科医の原敬造さん(65)とともに宮城県石巻市雄勝地区に向かった。原さんが代表を務める「震災こころのケア・ネットワークみやぎ」は石巻を拠点に、被災者を訪ねて話を聞く活動を続けている。

雄勝地区は津波で八割の家が全壊、住民の多くが地区外の仮設住宅などで暮らす。高台にあり難を逃れた自宅に一人で暮らす女性(60)は「周りにだれもいないだもんね、助けてっていつも。怖かった」と一週間前の暴風雪の時に感じた不安を訴えた。原さんは「そつだね」とつなげながら、ゆったりとした入った。

十五軒の集落で助け合っ暮らしていたが、他の家が



またこっちは取り残される。私には夢も希望もない。投げやりになるよ」とつぶやいた。

仮設暮らしの人、自宅にとどまる人、自宅を再建する人、復興住宅に入る人…。「震災直後はみんな同じだった状況にこれからは差が出てくる。取り残されたと感じる人はますますつらくなる」と原さんは言う。

仮設に入って認知症が悪化した女性(70)も訪ねた。震災後、親族の家など六度の転居を経て今の仮設に入った。三世帯が同居していた自宅では、庭で体を動かしていたが、仮設に入って閉じこもりがちになった。

「前は食事のメニューを考へて買物をお願いしてくれた薄暮の中、一軒だけ明かりがともる家。いずれも宮城県石巻市雄勝町で



仮設住宅を訪れ、笑い話を挟みながら悩み事などを聞く原敬造さん

ネットは今、五百軒の人たちを見守る。全国の精神科医の応援も得て訪問を続け、必要な場合は専門機関につなぐ。

仙台で開業する原さんは、三十代の七年間、石巻の病院に勤務した。被災で一変した街の姿や犠牲者の多さにショックを受けた。「長年住んでいる人にとって、地域のつながりや景色、自然も財産。自宅が再建できても空虚感、喪失感は続いていくんじゃないか」

雄勝からの帰り多くの子どもや先生が犠牲となった大川小学校に立ち寄った。一人一人の名が刻まれた碑を前に、原さんの言う喪失感の大きさが迫ってきた。

この日、一緒に回った精神保健福祉士の能戸奈央子さん(33)が、私の隣で手を合わせた。青森県むつ市出身で「被災地の役に立ちたい」との思いでネットに加わったという。被災地では高齢化が進む一方で、能戸さんのような若い人が新たに増えてきている。そこに希望を感じた。

(小林由比)